

新しい始源の探究と伊波普猷

平良 直（倫理文化研究センター専門研究員）

はじめに

日本において沖縄が「独自の文化」を有しているというのは現在では自明のことである。しかし、その独自性は日本という近代国家の枠組みを前提とし、近代日本の成立過程で発見・再編・創出されてきた側面をもつ。その独自性はどのような解釈によって生み出されたのかを、沖縄民族の自己像を探究し、あるべき姿を発信し続けた伊波普猷（1867～1947）という一人の知識人のあり方を通して、彼の沖縄文化の探究と解釈にみられる宗教学的な意味を考察する。

伊波普猷を取り上げたいと思ったのは現在の沖縄のおかれた状況が、基地問題をめぐり、あらためて「沖縄」とは何かという問題を再考することを迫っているからである。沖縄とは何かを問い直す必要は自分自身が沖縄の人間であるからでもある。筆者自身、沖縄の日本復帰前に生まれ、幼少期米国統治下でドルを使っていたことを明確に記憶しており、本島南部の米軍基地が隣接する地域に住んでいた。本島南部の多くの基地は返還され自衛隊の基地になっているところもあるが、いまだ多くの基地がある中北部は依然として復帰前と変わらない状況がある。沖縄以外の日本人全体にとっても基地をめぐる問題は、安全保障体制をどうするかという日本全体の問題でもあり、日本人全体にとって共有されてしかるべき問いである。

普天間基地の移設問題についてしばしば問われることがある。現県知事が辺野古基地建設に断固阻止するという意向を示しているが、どのように決着するつもりなのか、落としどころはあるのかなど、沖縄出身のあなたはどうか考えるかということ聞かれたりする。情勢の緊張状態をふまつつも、現状の軍事的合理性からも、政治状況としても、また倫理的にも現政府の強行的な姿勢は、あらたなしこりを残すだけではないかと疑問に思うと返答しているが、この問題は沖縄だけの問題ではなく我々日本人全体の問題なのだということを付け加えている。

ネットへの書き込みには「知事は琉球国王にでもなったつもりか」とか、「補助金をたかるときの戦術だ」とする意見などが多い。また、基地反対派の左派の行動は「常軌を逸しており」、政治的運動の場を失った左派がイデオロギーを保持するための最後の砦として沖縄を舞台に運動をたきつけているのだという見方が散見される。また沖縄のマスメディアの左派的偏向が原因であるという声もある。

私自身は別に政治的左派に与するものではないが、補助金目当ての駆け引きであるとか、左派主導のイデオロギーが元凶であるという一面的な結論への還元的理解は、問題をより複雑にし、沖縄の主張によく耳を傾けない形で一層沖縄を追い込むことになり、近年台頭してきた「沖縄独立論」が現実味を帯びてくる可能性もあると思っている。現に数十年前までは沖縄は日本ではない時代があったし、近代以前は日本国ではなかったということがある。この問題を「差別だ」と叫んでも、事態がすぐに好転するものでもなく、問題はきわめて構造的なものであり、世俗的な現代世界における、決して聖化されることのない不条理なサクリファイスのようなものである。ここで政治的、軍事的な事柄を含む問題をあれこれ記すことが目的ではないので、これ以上触れることは避けるが、地政学的に周縁に位置付けられた場所に住む人々が、中心から遠い周縁の人々と位置付けられたとしても、そこに住む人々が中心を持たないわけではない。宗教学的に言えば人間は中心の近くに住むことを欲するゆえに、自分たちが住む世

界に中心を打ち立てようとするのである。

「沖縄」という場所のイメージには相反する二つのイメージがある。一つは先の大戦での惨劇の歴史と基地の島というイメージである。もう一つは青い空と海、白い砂浜のある亜熱帯の楽園イメージである。後者は観光産業によって作り出されたものであるが、現在では基幹産業として、それがうまくいかなければ死活問題ともなる重要な産業となっている。地政学的軍事上の要の場所、基地の島のイメージともう一方の楽園イメージ。この一見相反するイメージの二重性はある観点からすれば広く共有される一つ的前提が基になっている側面がある。その前提とは、〈そこはそのイメージを抱く人々の生活の日常性からはるか遠くの場所に存するもの〉ということである。別の言い方をすれば、そこは「中心からはるか遠くの周縁にある場所」ということになる。この二つのイメージは、様々な言説によって共有され、沖縄の人々自身の「沖縄イメージ」に再帰化される側面があるが、その場所に身をおく当事者の共同的空間における中心の欠如は絶えず喪失感をもたらすものとなる。そして、この喪失感は基地をめぐる問題が持ち上がるたびに刺激されることになる。そしてさらに、その刺激が自分たちの住むことが可能な空間を獲得しようとする中心を象徴する独自の文化的表象の希求を刺激してやまないものとなる。

本稿で取り上げる伊波普猷の学問的探究は、時代はことなるが、近代の国家的枠組みとしての沖縄と日本との関係性、すなわち中心と周縁の関係性のなかで沖縄という場所の沖縄の人々にとっての中心性を回復しようとした営みとして解釈しようとするのが本稿の試みである。そして、このような一人の知識人を通して顕わになる宗教性を見ていきたい。